

年頭の挨拶

皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年 10 月に会長に再選され、第 23 期も引き続き務めることになりました。第 22 期では、東日本大震災からの復興支援、科学研究の健全性向上、フューチャー・アース等国際科学会議との連携による学術活動、原子力発電所からの廃棄物問題をはじめとする原子力利用のあり方、再生可能エネルギーの普及、大学教育の質向上、緊急時における学術からの社会への発信のあり方、さらに国際学術機関や各国の機関との協力推進等、多くのテーマについて、日本学術会議の全分野が関わりながら、多くの成果を上げてきました。10 月の総会での再選後、第 22 期の成果を報告する機会があったので、政府への提言等の受け入れられ方、社会の反響等の観点から、全国紙の一般記事や社説での取り上げられ方というやや限定された方法ですが、エビデンスを整理して報告しました。政府による法制度の運用への反映、新たな検討機関の設置等の成果がありました。また、より定量的に計れる全国紙の記事と社説への掲載回数では、第 22 期は、記事においては第 20 期と第 13 期に続く 3 番目の回数、社説においてはこれまでの最高の掲載回数と、社会からの注目度も近年において高まっていることが示されたのです。

さて、これらを受けて、第 23 期の活動が既に始まっています。現在活発に動いている委員会等は、やはり前期からの継続のものが多いのですが、いくつかは今期になってスタートしました。新たな成果としては、4 機関による研究健全性向上のための共同声明を日英両語で同時に発表したことがあります。去る 12 月 11 日、国立大学、公立大学、私立大学の各団体と日本学術会議が発したもので、日本のすべての大学と、多くの研究者からなる日本学術会議が協力した、恐らくこれまで初めての試みでした。内容は、日本の大学における研究によって多くの実績が上がっているものの、近年では、研究費の不正使用や研究不正問題も生じており、これに真っ向から取り組む決意を示したものです。第三者を含めた事後的な調査・究明活動とともに、予防的な取り組みの重要性を指摘し、研究健全性向上のための学習プログラムの習得の義務化を含む強力な協力体制をとっていくことを決意表明したものです。日本学術会議では、特に 2013 年 1 月に「科学者の行動規範」の改訂版を作成して以来、研究健全性向上への取り組みを継続して行ってきました。今回の画期的な 4 者共同声明を契機に、健全性向上の活動をより一層推進していきます。

もうひとつが、第 5 期科学技術基本計画への提言に向けた審議です。現在継続中ですが、日本学術会議のメンバーで、文部科学省の審議会や総合科学技術・イノベーション会議で第 5 期計画の議論に参加している方々等を中心に、幅広い専門分野をカバーするように委員会を設置しました。私見ですが、日本の科学技術政策が、「イノベーション」を重要な用語として取り入れることによって、成果の社会還元に大きな関心を置いたことは適切と思っています。一方で、多くの人材を科学技術の学習や研究に動員して、さらに大学や公・民の研究機関での基礎的な研究活動を盛んにすることが、いわば学術研究の基盤充実に役立ち、

優れた実用的研究開発成果を生むという関係があることをアピールして、学術研究の重層的な発展の必要性を主張することが重要と思っています。

昨年4月から、愛知県の大学に勤務することになって分かったことですが、南海トラフ地震津波の大きな被害予測に対応して、ことに静岡県から高知県に至る太平洋岸では防災・減災意識が非常に高まっています。日本学術会議でも、昨年2月に、「緊急事態における日本学術会議の活動に関する指針」をまとめました。その中では、関連する諸学協会と平時からの連携関係を保つこととしているので、そのための実践に入っていきたいと思っています。

昨年も、ノーベル物理学賞を3人の日本人研究者が受賞しました。最先端の研究領域で、高い成果を上げることは、それ自体が人類社会への大きな貢献であるとともに、研究のレベル全体を引き上げることに繋がる波及効果があります。その意味で、大型研究計画をはじめとする、最先端の研究に社会が関心を向けるように働きかける活動も重要です。

国際活動においては、第22期の成果として、枢要な国際組織において、理事会や委員会のメンバーに選ばれるなど重要な役割を果たすことになっています。さらに今年は、1月に日本学術会議等が主催する防災減災の国際会議、さらに3月に国連防災世界会議が開催され、来年はサミット会合が日本で開催されます。世界の耳目が集まる機会に、科学者からの適切なアピールを行えるように、タイミングを捉えた審議と発信を行っていききたいと思っています。

最後に、若手アカデミーがいよいよ発足します。少し立ち上げに時間を要し、ご心配をかけたかもしれませんが、ほぼ体制が整ったので、今年のできるだけ早い機会に発足させるべく準備したいと思います。若手アカデミーでは、国内の課題としては若手研究者の置かれている不安定な現状の改善のために活動してもらいたいのと同時に、国際的な舞台上で、日本の若手研究者が活動する機会を創りだしてもらいたいと思っています。

2015年1月1日 第23期日本学術会議会長 大西 隆